

クロマツが育てる人、教師 地域



総合的な学習

酒田市直十坂小学校

齋藤 辰典

平成十年の晩秋、季節はずれの湿った雪が庄内地方をおおった。学校文集名や校歌の詩、校章ともなっている学校のシンボル、クロマツは、大量の雪から枝を傷つけられ、倒木が学校周辺の至る所であり、痛々しい姿をさらけ出した。また、風が強まるたび、通学路に枝が落下し危険なため、安全対策に心血を注いだ年となった。

翌年、山形県庄内支庁森林整備課の指導員でもある保護者の呼びかけで、酒田市美術館横の造成地に植林事業協力の依頼があり、五年の児童と保護者約二百名がボランティアとして参加した。

その後、五年生の担任と「総合的な学習」のテーマについて話し合った際、雪害によるクロマツ林の痛々しさ、植林したクロマツの成長への願いが大きく浮上し、五年生のテーマ「十坂のクロマツ」が決まったのである。

当時、総合的学習は新しい教育の領域として提唱されたばかりであった。

「生きる力」をはぐくむため「自ら課題を見

つけ、解決の方法を考える力」「その方法に基づいて調べる力」「調べたことを表現する力」を身につけさせる学習であり、知識と知恵を学ぶ「学び学習」とも言われた。

本校では、理論は全員理解しているが、学年テーマ「十坂の人・自然・文化に浸る」に基づいた「十坂の柿」「十坂の海」「十坂の川」といったテーマはあっても、従来の教科指導の型にはまったままであり、新しい領域の総合的な学習には取り組んでいなかった。

教職員へ働きかけるには新しい教育について熱く語り、共に計画し、そして、一つの事例を通して他の学年に広げるべきと考えた。それが「十坂のクロマツ」である。

五年生一、二組の担任は意欲ある中堅の女性教師と本校に転勤してきたばかりの行動的な若い男性教師である。三十五時間分の総合的学習を計画するための話し合いを続けた。主旨を押さえ、今の子どもに欠けている生活・自然・社会体験の必要性、知識と知恵を結ぶ方法、教科学習と総合的学習の関連、学校課

題である開かれた学校づくりと地域との連携の仕方等々、幾度となく相談し合った。そして、総合的な学習は、体験の中からの「気づき」、それを解決するための「交流」、それをみんなに伝え、疑問にこたえる「表現」の三サイクル活動とすることにし、教師はアドバイザーに徹することにしたのである。

「十坂のクロマツ」は植林体験、枝打ち体験からスタートした。保護者、地区森林組合の協力を得ながらの枝打ち体験から特に、多くの課題が生じたのである。「何のために枝打ちをするのか」「普段は誰がこんな大変なことをやっているのか」「他の松林もこんなに荒れているのか」「落とした枝はどうするのだろうか」「大きな木が枯れるのはなぜか」という疑問は即学習課題となる。しかし、クロマツの歴史と恩恵には気づかないのである。

従来、五年生の二泊三日の自然教室は、山形県海浜青年の家で行っていた。それを正面に日本海、背面がクロマツ林の十坂の庄内砂丘で行うことにした。総合的な学習と結びつ



枝打ち体験する十坂小の生徒たち

けながら、少年少女らしい冒険心にあふれた十坂の子にするため「十坂少年少女漂流団」と名づけ、三泊四日の日程で行うことにした。雪囲い用の材料で丸太小屋をつくり、食材は海と海浜植物から求め、風呂は砂を掘り、太陽エネルギー活用で露天風呂である。もちろん野外炊飯の燃料は枝打ちしたクロマツの小枝である。子どもに負えない部分は保護者と地域の方々から支援をいただかなければならない。二人の日々の誠実な教育活動と教師としての熱さが父母の心を動かし、全面的な協力を得られることになった。

自然教室で燃料とする小枝を集めながら松林の整備を行った。また、松林の中の食材探しを通して、太い幹のクロマツから植林の歴史に気づかせた。

自然教室やボランティア体験から、「誰が、何のために植えたのだろうか」「植えた松の世話は誰がやったの」

「何年ぐらいで大きく育つのだろう」といった新たな課題が生じたのである。

自然教室三日目の朝、丸太小屋をのぞいたら化粧つきの女の子の担任のうらめしそうな顔と、目ヤニをつけ、すすけた顔の男の担任の疲れきった姿を見た時、両手を合わせる思いであった。しかし、子どもたちは元気で、もう一泊したいと言うのである。子どものエネルギーに驚き、たくましい顔つきに五年後、十年後の十坂の子の姿が重なって見えた。

これらの「気づき」活動から、

- ①クロマツそのものの特性・成長・被害について調べるグループ
- ②庄内砂丘とクロマツの関連について調べるグループ
- ③十坂のクロマツの歴史的な背景について調べるグループ

という「交流」活動が始まったのである。

どのグループも自分の足で現地調査し、森林組合や地区の古老の話を聞き、この地で植林事業を行った佐藤太朗右衛門の子孫の家を訪ねたり、インターネットで調べたり、図書館で調べたりする多様な活動が見られた。

学校五日制休業日にグループで活動したり、親子で鳥海山裾野の吹浦から湯野浜までの三十四キのクロマツ林を車で調べた家族があったのはうれしかった。

子どもたちは学習すればするほど、庄内砂丘に広がる数百万本のクロマツの植林の歴史と先人の苦労に関心を持つようになった。

「表現」活動の大きなねらいは佐藤太朗右衛門の偉大な功績を劇化し、「十坂地区文化祭」で地域の人に発信することである。

文化祭当日、幼稚園児から大人まで約千名

が鑑賞してくれた。また、協力してくれた地域講師や森林組合の方々の顔も多く見られた。「十坂のクロマツ」の子どもの熱演に会場が静まり返り、観客の中に目頭をおさえている人の姿も見られ、終演時には大きな拍手に包まれた。私は五十四名の五年生の育つ姿に胸を打たれ、二名の担任の涙に教師としての職能成長と確かな歩みを感じさせられた。「十坂のクロマツ」は子どもも教師もともに成長させてくれたのである。

近年、いじめや不登校、反社会的な子どもの増加、一部教師の不祥事などで、学校現場に非難の矛先が向けられ、元気の無い教師が増えていると言われている。

しかし、「十坂のクロマツ」は、父母、地区の方々、十坂の教育を理解し、支援し、「十坂の子は十坂全員で育てる」という機運のきつかけとなってくれた。

また、各学年で行っている総合的な学習「十坂の人・自然・文化に浸る」活動は教師と父母の絆を強め、教師の心の扉を開いてくれた。今、十坂の子どもも教師も父母も十坂の街の元気の素となっている。

■ 齋藤 辰典

酒田市立十坂小学校校長。
酒田市坂野辺新田字地続山987の1。
1947年 酒田市飛島生まれ。
山形大学卒業後、本桶小、琢成小、
西荒瀬小、日向小、海浜青年の家、
南遊佐小、宮野浦小勤務を経て1998
年現勤務校に新採校長として赴任。